

一〇年先の大学像を先取りしているオーストラリア

オーストラリアは、米国と同様、歴史的にはイギリスから分離独立した国である。従って、同国は英語国であるほか、大学についても万事イギリスの垂流であろう、あるいは兄弟国である米国と類似した性格を持つ国だろう----これが、筆者がかつてオーストラリアの大学とその学生について抱いていたイメージであった。しかし、必ずしも全てがそうではなかった。

もはや八年前のことだ。筆者がそれまで二年間教壇に立っていた米国東部の大学（プリンストン大学）を去って豪州シドニー所在の大学（マックオーリー大学）に赴任した時、そうした理解は三つの点で相当に違うことに気がついた。

オーストラリアの大学--三つの印象

第一は、大学の教壇に立ったとき、そこで目にする学生達の顔ぶれが予想外だったことである。米国での学生は、欧州系の顔立ちが大半であり、これにアフリカ（黒人）系が二割程度加わっていた。一方、三年余り前まで白豪主義を採用してきた豪州では、ほとんどがアングロ・サクソンの血を引く学生だろうと漠然と考えていたが、それは全く当たらなかった。筆者が担当した授業（学生数約五〇人）では、黒い顔をした学生がほとんどいない一方、全体の約三分の一近くがアジア系の容貌をした学生だった。彼らは、中国やシンガポールなどアジア諸国からの留学生であるか、あるいはアジア出身でオーストラリア国籍を持つ一世ないし二世である。

オーストラリアは、一九八〇年代後半以降、東アジア諸国の経済発展を目の辺りにしてそれまでの方針を転換し、将来は英国との絆に拘泥するよりもむしろアジア太平洋国家として新たな発展をしていこう、という方針を採用している。このため、移民の受入れは、アジア諸国からの移民も含め積極化している。オーストラリア社会が、このように急速に多民族あるいは多文化によって構成される社会への転換しつつあることを、教室において実感した次第であった。ちなみに、当時の同僚教員をみても、彼らの生誕地は英国、ドイツ、インド、エジプト、マレーシア、中国などと極めて多様であり、文字どおり色とりどりの顔ぶれであった。豪州生まれの同僚が、自分たちはマイノリティ（少数派）だといって、冗談まじりにぼやいていた。

第二に意外であったことは、オーストラリアの学生は、英語をしゃべるであろうから、米国の学生と同様、社交的そしてかなり攻撃的だろうと勝手に想像していたが、実はそうでなかったことである。

米国の学生は、授業中に活発に質問する（幼稚な質問も恥じらいなくする）うえ、試験答案の採点が不満であるなどといってクレームを付けてくることが少なくない。しかし、オーストラリアでは、アジア系の学生だけでなく、英語を母語とする欧州系の学生も、米国に比べると全体に控えめであり、おっとりしている（この点はむしろ日本の学生に似ている）。その理由は、未だ十分わからないが、多分、オーストラリアは広大な農牧畜用の土地や天然資源に恵まれた国（ラッキー・カントリー）であったため、社会全体としても鬭争的になる必要がなかったことによるのではないかと推測している。

なお、豪州の学生にせよ米国の学生にせよ、勉学に対する真剣さは、日本の大学生

(比較的勉強熱心とされる湘南藤沢キャンパスの学生を含む)を相当上回るという印象を禁じえなかった。これは、一つには、豪州や米国では授業料を両親に支払ってもらうのでなく、学生自ら稼ぎだして支払うケースが多いことによるものであろう。この点、日本の学生は一見恵まれているように見えるが、国際的にみればその点でやはり甘やかされており、その結果が、残念ながら学業への熱意欠如の一因になっているように思われる。

第三の意外性は、オーストラリアの教育に関する制度や名称(肩書きなど)は、米国とは大きく異なり、階級性の厳しい英国の伝統を継承していることである。日本や米国では、大学教師の肩書きはプロフェッサー(教授)が基本となっているが、豪州では、圧倒的多数がレクチャー(講師)やシニア・レクチャー(上級講師)であり、プロフェッサーという肩書きは、英国と同様、最高位のごく一部の教師に対してだけしか与えられていない。そして待遇面でも、プロフェッサーの研究個室は広さが通常の二倍あるなど、格段の差異が設けられている。

筆者が在籍した大学では、経済金融学部の教員約一〇〇名のうちプロフェッサーはわずか七名であった。また、博士号を持つ場合には、社会一般の慣行としても、ミスター誰それではなく、ドクター誰それというように、日常的にも明確に肩書きを意識した敬称が使われる。これは何も大学教員の場合に限らず、社会一般の慣行であり(例えば新聞記事でも必ず区別している)、その点で寛大な米国とはずい分異なっている。

大学は一国社会の反映

教育システムは、結局その社会の性格を反映する。オーストラリアの一つの特徴は、同国の多文化社会への変質が、大学の運営面にも現われている点だ。例えば、教員任用においては、公平を期すため徹底した公募制が採用されている(透明性の高さ、そしてルールの重視)。また大学における各種委員会等の決議においても、詳細かつ明確な議事録を作成することによって、意志決定過程のアカウンタビリティを確保するとの考え方が強い。これらの点は、同質社会である日本とは相当異なるといえよう。

なお、豪州の外国語教育においては、一九八〇年代後半以降、日本語への関心が急速に高まり、多くの大学では日本語が欧州言語よりも人気のある外国語となっている。

豪州のいま一つの特徴は、地理的に欧米から隔絶された位置に置かれていること(隔絶性という暴虐)が大学教育にも影響していることである。同国では、こうした地理的ハンディキャップを克服するため、早くからインターネットの育成が国策として採られており、インターネットの普及と利用の面では日本を凌駕し全世界でトップをゆく国の一つとなっている。その結果、国内での遠隔教育にも、早くからインターネットが活用されてきている。

また、高等教育の提供を通じてアジア太平洋地域に溶け込もうという意欲も強い。例えば、筆者が在籍した大学は現在、シンガポール、香港、東京などで修士課程(ファイナンス修士学位)の授業を現地でも提供しており(いわば出前の講義)、これら都市の在住者はいながらにして同大学の正規の学位を取得できる。また、とくにアジア諸国からの留学生の受け入れにも積極的であり、同大学のホームページは、英語の

ほか、七つの外国語（中国語、マレー語、ベトナム語、タイ語、日本語、スペイン語、ポルトガル語）の中から選択して読むことができるように配慮されている（<http://www.mq.edu.au/internat.html>）。

日本から見た場合、オーストラリアはいくぶん影の薄い国である感は否めない。しかし、同国の大学のあり方をみると、西欧とアジアの融合、グローバル化とアメリカ化の関係についての考え方、ルール重視と透明性の確保、インターネットの積極的活用など、日本の大学にとって今後の課題を先取りしている面が少なくないように思う。

（慶應義塾「三田評論」一〇二七号、二〇〇〇年八-九月）